

『伊勢物語拾穂抄』無刊記本の本

青 木 賜 鶴 子

要 旨

北村季吟の伊勢物語注釈書「伊勢物語拾穂抄」の板本は、無刊記本が最も古く、延宝八年（一六八〇）八月長尾平兵衛版、同藤野九郎兵衛版がこれに次ぐと考えられる。鉄心斎文庫には無刊記本を含む一五本の刊本が蔵され、初期の版が多いのは貴重である。

現存するほぼすべての版が、後水尾上皇への献上について記した寛文三年（一六六三）付の周令の跋文を持つ。板本以前に成立した「伊勢物語拾穂抄」（寛文二年序）奥書によれば、周令は献上の後に季吟所持の本に跋文を記したことが知られ、板本の跋文は板本刊行に際し季吟所持本にあった跋文を付したものと考えられる。

先ごろ入手した無刊記本は、この周令の跋文を持たず一部の文字が他と異なる。本稿では、鉄心斎文庫本を中心に初期の版について検討する。

はじめに

北村季吟の伊勢物語注釈書『伊勢物語拾穂抄』の板本については、翻刻や影印が刊行され、⁽¹⁾数種の版が知られる。現在までに確認したものは次の七種である。

イ 無刊記の本。

ロ 「延宝八年仲秋吉辰／長尾平兵衛開板」の刊記をもつもの。

ハ 「延宝八年仲秋吉辰／藤野九郎兵衛梓」の刊記をもつもの。

ニ 「延宝八年仲秋吉辰／藤野九郎兵衛梓」を残し、次の二丁に「平安書林／橘枝堂蔵版目録／京二条通富小路西江入町／野田藤人」に始まる目録があるもの。

ホ 「延宝八年仲秋吉辰」を残し、奥付に「文化二年丑六月補刻／京都書林／野田藤人／長村半兵衛／朝倉義助」とあるもの。

ヘ 「延宝八年仲秋吉辰」を残し、表紙見返しに「北村季吟著／伊勢物語拾穂抄 全二冊／文政十一歳戊子春補刻／大阪書林 奥田松庇閣蔵」、奥付に「松庇閣蔵版書目 大阪心斎橋通博労町／古本売買仕候／奥田彌助」とあるもの。

ト 「延宝八年仲秋吉辰」を残し、奥付に「京都書肆／一条通日暮西／石田治兵衛」とあるもの。

ニ以下は延宝八年刊本の後印と見られ、刊年のあるものではロハが最も古い。鉄心斎文庫には板本一五本が蔵され、うち一三本はイロハに属する。本稿では、鉄心斎文庫本を中心に初期の版について検討したうえで、先ごろ入手した

無刊記本の紹介と位置づけを試みる。

二 鉄心斎文庫本の詳細

鉄心斎文庫本の内訳は次の通りである。同じ版でも摺りの良し悪しがあつたり書入が見られる本もあり、より良い本を求め続けられた結果であろう。

イ 無刊記本 一本（請求記号 098-880 〈五冊〉）

ロ 長尾平兵衛版 五本（098-870 〈五冊〉、098-871 〈五冊〉、098-872 〈二冊〉、098-873 〈四冊〉、098-935 〈一冊〉）

ハ 藤野九郎兵衛版 七本（098-874 〈四冊〉、098-875 〈二冊〉、098-876 〈二冊〉、098-877 〈二冊〉、098-878 〈二冊〉、098-879 〈四冊〉、098-938 〈一冊〉）

ホ 文化二年版 二本（098-948 〈二冊〉、098-950 〈二冊〉）

版心に「伊拾穂一」から「伊拾穂五」とあり、本来は五巻である。イロのうちには五冊本があるが、後には、巻四・五を合わせて四冊本としたり、巻一・二を一冊、巻三から五を一冊として二冊本としたものもある。

イロハの巻末部分を挿図1と挿図3に示す。ロハの刊記はここにある。

刊行はイロハの順であろう。匡郭の縮小も文字の欠損もほぼイロハの順である。一例のみ例示する（挿図4と6）。
巻四第二四丁ウラ、第二百一十一段の伊勢物語本文、

返し、

うぐひすの花をぬふてふかさはいな

の傍線を付した文字である。イ無刊記本（挿図4＝098-880）、ロ長尾版の一部（098-871）には文字の欠損は見られないが、「ふ」の一部欠損（挿図5＝長尾版 098-870）、「つ」「ぬふ」の一部欠損（挿図6＝藤野版 098-879）のように文字が欠損していく。

三 周令の跋文

以上のように、刊年が明らかかなものでは延宝八年八月版が最も古く、無刊記本がそれに先行すると思われるが、第百二十五段の注の後、巻四最終の第二六丁ウラに、寛文三年（一六六三）四月の周令の跋文をもつ（挿図7）ので、遅くともこの頃以前に注釈がまとめられていたと見なければならぬ。その跋文は以下の通りである。

此伊勢物語拾穂抄季吟所撰也。蓋闕疑抄之外、或師説、或異説、或又拾其違者、集之名拾穂抄云。属者装背此一書冊、以余為介使献上諸太上法皇。辱有勸覧。豊非所榮哉。侃以書其後矣。

寛文癸卯孟夏吉辰

周令跋

季吟が撰集したこの「伊勢物語拾穂抄」は、幽斎の『闕疑抄』のほか、師説、異説、或はまたこれと違う説を拾い集めたものであり、近ごろこの一書冊を装訂し、自分が使となつて太上法皇（後水尾上皇）に献上したところ、辱くも勸覧があつた。まことに榮誉なことである。そこで、その後に書す、というのである。

しかし、既に論じたことがあるが、寛文三年の時点で板本『拾穂抄』が完成し、それを献上したとは考えられない。その理由の一つは、板本『拾穂抄』が、『伊勢物語』本文をすべて掲げ、頭注・傍注によつて注釈を施す型式になつてゐることの新しいさである。板本に多く見られるこの型式は、万治・寛文・延宝の頃に始まつたとされ、季吟の古典注

釈書で言えば、延宝三年（一六七五）刊の『湖月抄』以降に見られる型式であつて、承応元年（一六五二）成立・同二年刊の最初の板本『大和物語抄』をはじめ、寛文元年（二六六一）刊の『土左日記抄』、寛文七年刊の『徒然草文段抄』、寛文十年序・同十一年刊の『和漢朗詠集註』では、本文をいくつかに区切つて掲げ、その後に、一、二字下げて注釈を書く型式になっている。寛文三年の時点で板本の『拾穂抄』のような頭注・傍注型式の注釈書を成していたとは思えないのである。

第二の理由は、板本『拾穂抄』がいわゆる諸注集成の体裁をとることである。序文に、

此抄に『一』とつけしは『愚見抄』の儀也。『肖』は『肖聞抄』、『清』は『惟清抄』、『玄』は『闕疑抄』也。諸抄同義なる物は詞すくなきを用侍り。

と、引用した諸注釈の名を列記している通り、板本『拾穂抄』は、一条兼良の『愚見抄』と、『肖聞抄』『惟清抄』『闕疑抄』などの宗祇・三条西家流の注釈を、師貞徳の説を中心にまとめたものであり、先行注釈書と師貞徳の説をまず引用し、その後に「愚案」「私云」の形で自説を述べる形をとっている（このほか「宗祇云」として宗祇の『伊勢物語山口記』も引用する）。そして諸注の説が分かれている場合には「両説」としてその両方を引用し、一致する場合は一書で代表させて「諸抄同」などと注記している。みづから『伊勢物語御抄』を著し、しばしば『伊勢物語』講釈もした後水尾上皇であれば、板本『拾穂抄』が引用するような諸注は当然所持されていたはずであり、上皇にとっては貞徳と季吟の説だけで良かったはずである。板本に見られるような諸注集成の形にして献上したとは思えないのである。

さらに、同じく後水尾上皇への献上と板行の形をとった『土左日記抄』の場合、『季吟日記』によれば、献上本は寛文元年七月十六日から八月十一日に執筆、十月十九日奏覧、板本の板下は十二月十四日から執筆、同二十八日完成と知られる。つまり、上皇への献上の後、改めて坂下を書き起こしたのであり、「奏覧の本とは所々かはれり」と日記に

書いている。『伊勢物語拾穂抄』の場合も同様であつたと考えるのが自然であろう。これが第三の理由である。

ところで『伊勢物語拾穂抄』には、一般に知られる板本のほかに、それに先行する後水尾上皇への献上本があつた。献上本そのものは知られないが、献上本の手控えとして残した季吟所持の本の写しと考えられる本が現存する。新玉津島神社本「伊勢物語 長頭丸」、鉄心斎文庫本「伊勢物語拾穂抄」及び大阪大学附属図書館本「伊勢物語拾穂抄」である。⁽⁴⁾

三本ともに寛文三年三月九日の季吟の奥書を持ち、新玉津島神社本は寛文二年（一六六二）某月二十八日の序文と、他本に無い奥書を持つ。これによれば、寛文三年三月九日、季吟は周令を介して天皇またはそれに准ずる人物に本書を「奏覧」し「覧覧」があつた。その本は季吟自筆、表紙に彩雲翁（藤田友閑）の筆で「伊勢物語拾穂抄」と外題したもので、使に立つた周令は季吟所持の本に跋文を記したことがわかる。この事情は、板本跋文のいうところと一致し、上皇への献上を謳う板本の跋文は、もともとはこの季吟所持の本に付されたものと考えられる。

すると板本の跋文は、板本の成立とは関わらないことになる。板本成立の下限は延宝八年（一六八〇）八月であるが、上限は『和漢朗詠集註』が上梓された寛文十一年（一六七二）以降、おそらくは『湖月抄』の出た延宝三年（一六七五）頃以降と見てよいだろう。

四 無刊記本の一本

先ごろ入手した無刊記一冊本は、この周令の跋文を持たず、一部の文字が他と異なる。

該本は、他本で跋文のある巻四第二六丁ウラを白紙とする（挿図8）が、オモテは他本と同じく第二百二十五段の注があり、柱も彫られている（挿図9）。ウラが白く残されているのは、この時点ではウラにはまだ何も彫られていなかっ

た、つまり跋文はこの時点ではまだ付されていなかったとも考えられる。

もう一つ異なる部分は、卷一第四丁ウラ最終行、総論を述べる部分で、

此物語のうたの事、故人の説々

三代実録云、業平体兒閑麗放縦不拘略無才学克作和哥。

古今和歌集序云、在原の業平は其心あまりて詞たらず。しぼめる花の色なくして匂ひのこれるがごとし。

紀貫之の此論を業平のうたはいひたらぬ所あるやうに心得侍るはひが事也。三十一字の数さだまりたる中にこゝろを深くふくむる事は、あるはてにをはにこめ、あるは詞づかひをよく心得侍る故也。業平は天性其骨を得たまへる故に、月やあらぬといひ、わが身一はなどいひて其心詞の外にあまり侍る也。(下略)

とあるうち、他の本に「紀貫之の此論を」(挿図10 || イ無刊記本○○○○○)とある部分が「此貫之の此論を」(挿図11 || 架蔵)となっている。「此貫之の此論を」は稚拙として「紀貫之」に訂正したのであろう。

該本は、板本が一応の形となり周令の跋文が付される直前の段階、完成直前の姿を示すのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 『国文学註釈叢書 三』(名著刊行会、一九二九年)、『演習 伊勢物語―拾穂抄―』(片桐洋一、青木賜鶴子編著、勉誠社(大学古典叢書6)、一九八七年)に翻刻。『北村季吟古註釈集成』(新典社、一九七六年)に影印。なお『伊勢物語古註釈大成 七』「伊勢物語拾穂抄 延宝八年刊」(笠間書院、二〇一九年刊行予定)にも翻刻掲載予定。

- (2) 拙稿「伊勢物語拾穂抄」の成立」(『女子大文学(国文篇)』第三八号、一九八七年三月)、同「伊勢物語拾穂

抄について」〔演習 伊勢物語―拾穂抄―〕勉誠社、一九八七年）。野村貴次氏『季吟本への道のり』（新典社、一九八三年）にも指摘がある。

（3）片桐洋一氏編『首書源氏物語 総論・桐壺』解説（和泉書院、一九八〇年）。

（4）『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊 五』（八木書店、一九八九年）に「初度本伊勢物語拾穂抄」と名付けて影印が収められている。『伊勢物語古注釈大成 七』「初度本伊勢物語拾穂抄」（笠間書院、二〇一九年刊行予定）に翻刻掲載予定。

〔付記〕

※本研究は国文学研究資料館基幹研究「鉄心斎文庫伊勢物語資料の基礎的研究」（代表・小林健二教授）及びJSPS 科研費15K02221「古注釈・挿絵を手がかりとした中世伊勢物語受容史の研究」の助成を受けたものです。

※板本の刊行順については、神作研一教授にご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

插图1 イ無刊記本 (998-880) 卷末



插图2 ロ長尾版 (998-871) 卷末



插图3 ハ藤野版 (998-879) 卷末



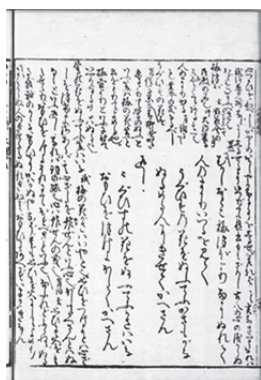
插图4 イ無刊記本 (998-880) 四24ウ



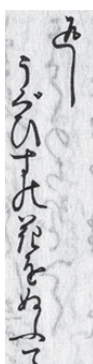
插图5 ロ長尾版 (998-871) 四24ウ



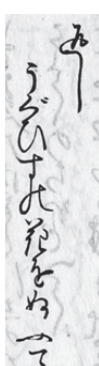
插图6 ハ藤野版 (998-879) 四24ウ



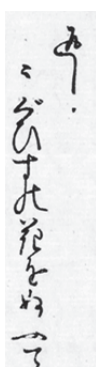
(拡大)



(拡大)



(拡大)



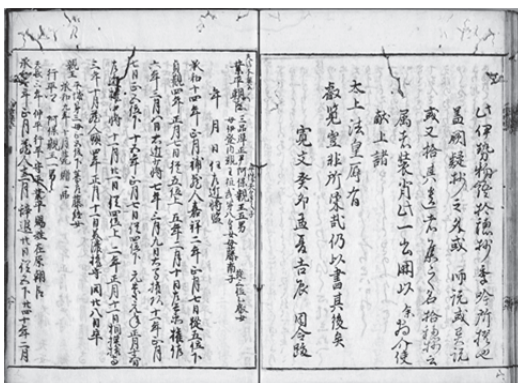


插图 7 口長尾版 (098+87c) 四 26 ウ

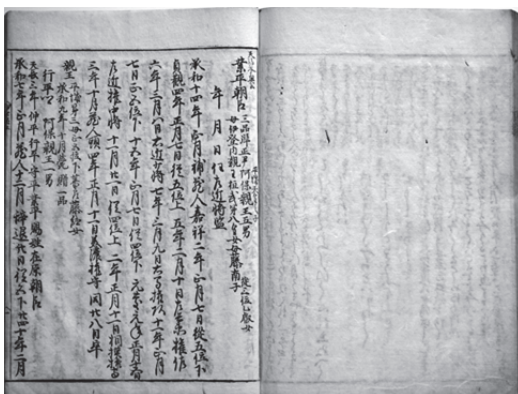


插图 8 架蔵本 四 26 ウ

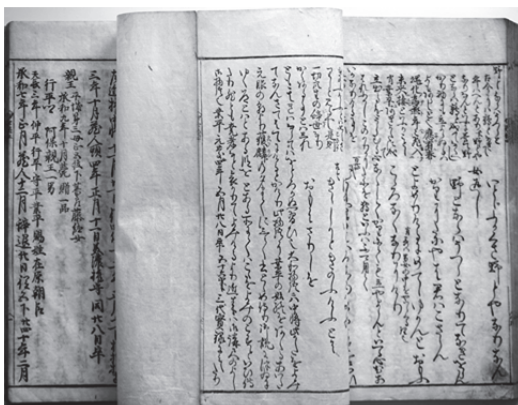


插图 9 架蔵本 四 26

A Mu-kanki-bon, *Ise Monogatari Shūsui-shō*

AOKI, SHIZUKO

The *Mu-kanki-bon* (a printed book with no publication information) is considered as the oldest book among the printed books of *Ise Monogatari Shūsui-shō*, the annotated edition of *Ise Monogatari* by Kitamura Kigin. Books published by Nagao Heibee in August of *Enpō* 8 (1680) and books published by Fujino Kurobee in the same year/month are thought to be the second oldest. 15 of printed books including *Mu-kanki-bon* are in the Tesshinsai Collection, and they are valuable because many of them are early versions.

Almost all existing versions have an afterword written by Sharei in *Kanbun* 3 (1663) regarding the donation to the Emperor Go-Mizunoo. According to the colophon of the *Ise Monogatari Shūsui-shō* (*Kanbun* early 2) that was completed before printed books were published, *Sharei* wrote an afterword in the *Kigin* owning book after the donation. Then, this afterword is thought to have been appended later to the printed books in publishing the printed books.

The Mu-Kanki-bon that we obtained recently has no this afterword written by *Sharei*, and some characters are different from others. In this article, we will discuss the early versions of the books focusing on the ones in the *Tesshinsai Collection*.